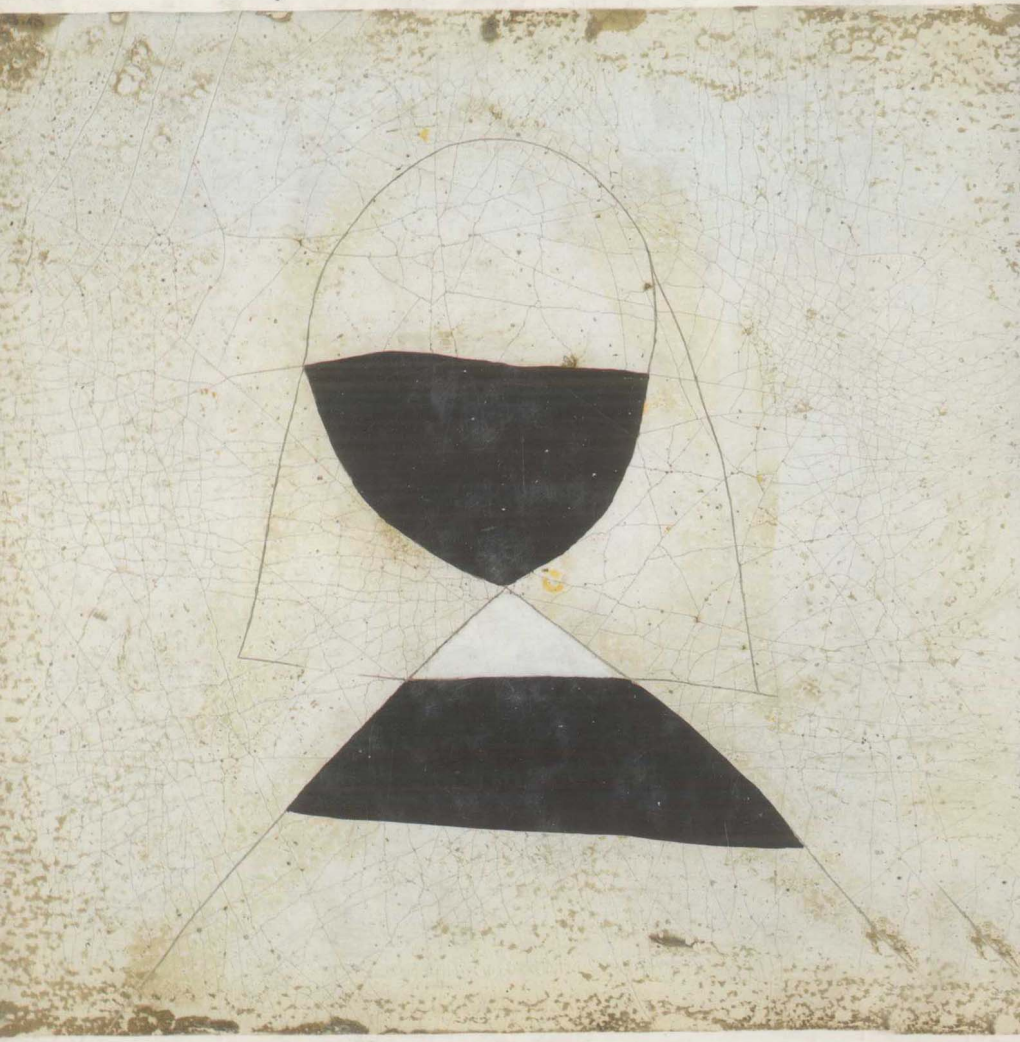
渇水

河林 満



渴水

河林 滿

著者紹介

一九五〇年十二月十日、福島県いわき市生れ。都立立川高等学校定時制卒業。現在、立川市役所勤務。十八歳から小説の習作を始め、立川市の同人誌『群居』、『裸馬』に拠り、また三田誠広、岳真也、笹倉明氏らと雑誌『えん』に参加して創作活動を展開。九〇年五月、「渇水」で第七〇回文學界新人賞受賞、同作品が第一〇三回芥川賞候補となる。

渇水

一九九〇年八月十五日　第一刷
一九九〇年九月二十日　第二刷

定価はカバーに表示してあります

著者　河林満

発行者　豊田健次

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

© Mitsuru Kawabayashi 1990, Printed in Japan

ISBN4-16-311940-X

万一落丁乱丁のあった場合はお取替えいたします

目次

渇　水……5
海辺のひかり……71
千年の通夜……137
金棺出現……163

裴頠司修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

作品集

渇水

渴

水

I

相棒の木田とともに、市内御影町の小出秀作の水道を停水執行していたとき、小出のふたりの娘たちは家にいた。というより、途中で帰ってきた。小学五年と三年の彼女たちは、家の裏の便所にちかいところにある、水道のメータボックスに屈み込んでいる岩切と木田の前に微笑みながらあらわれた。

「おじさんたち、何しているの？」

突然の声に、岩切はおどろいて顔をあげた。二人は、手になにかの実をもっていた。停水執行ということを、どう説明しようかと迷っていると、上の子が、

「もう、お水が止まってしまうの？」

といった。すこしも曇ったところのない素直な声だった。この子たちとは、何度も顔を合わせている。岩切は立ちあがって、

「それ、なんの実なの？」

ときいた。ふたりの掌にはうすあかい果汁がついていた。

「これ、蛇苺の実よ」

そっと掌をひらいてみせたのは、下の娘だった。この辺りの雑草に、よく蛇苺がなっているのを岩切は子供のころから知っていた。九月のなかばになると、秋祭りの神輿が、泥道に伸びた雑草を踏みしだいて、土手を駈けのぼり、川に入るのだ。木田が、判断をあおぐように自分をみつめている。額をぬぐうと、思ったより汗がふきだしている。

「ちょっと待ってもらえるかな。いま、水を溜めさせるから」

岩切は木田にいった。木田は、わかりましたといって、メータボックスの脇の止水栓に近づいた。

三日前から、容赦のない炎暑の夏がつづいていた。解除される見通しのない、給水制限が都から出されていて、多摩地域にあるこのS市も、それに倣っていた。市内のプールは、どこも、開店休業を余儀なくされていた。泳ぎにいけない子供達が、冷房のきく公民

館や図書館で、何人か集まっては、宿題をかたづけているというのを、岩切はよく耳にした。

川の風がふいてくる。草のにおい、焼けた石のにおいがまじった風だ。小出の家は、川の土手下にあった。セメント工場の隣だったので、風には石灰のにおいもまじっていた。土手にのぼると、遠くの国道の鉄橋や、オレンジ色の電車のわたる中央線の鉄橋もみることができた。そのむかし、戦争が終わった夏に、台風で大増水した川へ電車がおちてたくさんの死者がでたことがあったが、いまは水嵩も減って、ゆるい二筋の流れを蛇行させているだけだった。流れと流れのあいだにはびっしりと葦が群生し、こちらの、土手に近いところには、白く乾いた石が日に晒されていた。対岸は、隣の市だった。段丘になっていて、何ヶ所か、緑地のなかに住宅が密集するのが見えた。

開栓器とよばれる、身の丈ちかい長い鉄の棒で、木田は、地中に一メートルほど埋まっている止水栓を、体の重さをかたむけながらゆっくりと開けていった。彼の首筋に汗が光っている。いまさっき、同じような格好で、止めたばかりだったのだ。

「いいですよ」

開栓器をひきぬいて、木田がいった。まだ、量水器は取り外してなかった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

岩切は、恵子という上の娘に向きなおると、すこし表情をきびしくしていった。
「きょう、お母さんはかえってくるよね？」
「ええ。帰ってきます」
「もう、お母さんには何回もお知らせしてあるんだけど、どうしても今日お水を止めなくてはいけないの。それで、いまバケツとか洗面器とかボールとかに、水を溜めてください。それから止めますから」
恵子は、すこし困ったような顔をした。色がくろく、大きな目をしている。洗い込まれた半袖の白いブラウスを着て、黄色いスカートをはいている。妹は、久美子といった。ふたりは、おそろいの服装だった。
「こっちへきてください」
思案顔のあと、恵子はそういって岩切の前を歩き、玄関のほうへ誘った。岩切は、しかたなく、木田に待っていてくれるように頼むと、上の娘のあとについて玄関のなかにはいった。靴脱ぎ場の脇に、下駄箱があり、上に水槽がおいてあった。出目金が三匹、泳いでいる。
「いくら、たまっているんですか？」

恵子は、まるい卓袱台に蛇苺の実をおくと、こっちへふりむいた。大人びた顔をしていった。このとき久美子が、岩切の横をすりぬけて部屋に上がり、姉とおなじに手のなかの実を卓袱台においた。岩切は、水槽のなかの出目金が、ゆっくりと向きをかえて、こちらに口先をつきだしてくるのをみながら、

「あのね、恵子ちゃんが、心配しなくてもいいことなんだよ」

いいながら、矛盾した思いにとらわれてもいた。

「でも、わたし計算できます、ちょっと、待っててください」

奥の部屋へ、恵子は入っていった。久美子は、蛇苺の実を茶碗にいれてかたづけてしまうと、テレビの上から持ち出したおはじきで遊びはじめた。

子供が帰ってこなければよかったのだと、岩切はタイミングの悪さを思った。水道の量水器をいれてあるメータボックスに、小出秀作の妻、娘たちの母親の手紙は、今日は入れられてなかった。これまで、この家に何回停水の予告を出したことだろう。予告を出し、なんの音沙汰もなく、ついに停水執行にくるとボックスのなかに手紙がはいっているのだった。『すいどうやさんへ』と書いてある。『みずをとめないでください。かならずおしはらいします。みずをとめないでください。はずかしいことですが、うちはふつうのうちで

はないのです。』鉛筆書きの字体は、筆圧に差があって、切迫した感じと妙になげやりな感じが滲んでいた。それをみると、岩切は止めるわけにはいかなかった。いったい何がふつうではないというのか。岩切は、その手紙を見ると、逆に水を止めてくださいと言われている気になった。水を止めてください、そうすればわたしの家はふつうになるのです……手紙を見ると、自嘲的な気分になるのが自分でも不思議だった。

が、支払いはその後もなかった。岩切が訪れて顔をあわせても、はかばかしい答えは出なかった。しかも会えたのは一、二度にすぎない。支払えない状況を理解したうえで、分納の計画をたてさせ、それに印鑑を捺印した約束の書類を作るのが岩切の仕事だった。が、その書類すら、小出秀作については作ることができないでいた。

水道料の支払いには、口座振替、納入通知書による支払い、それと集金があった。集金制度は、もともと収納率がわるかったが、六年まえの料金改定からさらにひどくなって、一年前に廃止された。小出秀作は、ちょうどまる三年分滞納していた。集金扱いの分と、集金の廃止とともに自動的に移行した納入通知書扱いの分と。

久美子のおはじきの音が、家のなかにひびいている。いっぱいに開けはなった窓で、風鈴もなっている。窓は、高目にとりつけられていて、家のなかはすこし暗かった。物干し

のビニール紐に干された、白い手ぬぐいのこちらがわに、陰りができてきた。
岩切は、家の脇の古い万年塀からつづくセメント工場を見やった。砂利を運ぶベルトコンベアーが、ゴンドラのように空中をわたる隙間から、池が光って見えた。水田に水をひいた、むかしからある池だ。が、セメント工場から流出した毒性の物質で、そこにいた魚が全滅したことがある。その時も夏で、日の光に輝く池の表に、魚の白い腹が浮き上がった。
「これで、計算します」
恵子は、電卓をもってあらわれた。ひどく不格好な、ゲタのように大きな計算機だった。両端をていねいにもって、お盆でお茶でも出すようにして、恵子は岩切の前においた。
「おじさん、いくらかいってみてください。計算しなければならないんでしょう？」
恵子の口調には、どこか、かいがいしささえあった。
岩切は、黒鞄のなかの滞納整理簿をぬきとると、小出秀作の滞納金額のいくつかをいってみた。彼女からとる気などある訳はなかった。金だってそれほど持ってもいなかったろう。ただ、数字をならべてあげたいと思ったにすぎない。恵子は、復唱しながら人差し指で几帳面にその数字のキーをおした。が、どうしたことか、数字はとどまらずに表示板か

ら消えてしまう。

「電池がないのじゃないかな」

しばらくして、岩切はいった。

「これは、電池がいらないやつだって、おとうさんがいっていました」

怒ったように、下を向いたまま、恵子はいった。それでも、彼女はやめなかった。すんなりした、かしこそうな指が、まっすぐに何回も数字を突っついている。

「恵子ちゃん」

ある瞬間、岩切はいった。

「きのう、おかあさんはかえってきたよね」

「はい」

「今日もかえってくるよね」

恵子は、すこしうつむいた。

「かえってくるよ」

そのとき、答えたのは、妹の久美子だった。おかっぱ頭で、姉とおなじように、よく日にやけて黒かった。さっき、自分の脇をとおりぬけたとき、川の匂いがしたのを岩切は思

い出した。

水を、止める。そのために、岩切は、風呂場の水、台所のボール、洗面器と、思いつくかぎりの器に水を溜めさせた。「これにもいれておいて」と久美子がいったのは、出目金の泳ぐ水槽だった。古い水を半分すて、新しい水をいれた。出目金は、新しい水をよけて水槽の隅にいちど行き、そこから浮上して水面に口先を出した。

次の停水世帯への移動を考えれば、なるべくはやく処理したほうがいい。が、こうしているうちにも母親が戻ってこないかという期待があった。彼女が働きにでていて、帰宅がしばしば夜更けになるということは、娘たちから聞いていた。なんということもなく、近所からも耳にしていた。父親が、もう何ヶ月も家にかえっていないことも、聞き及んでいた。が、ひょっとして母親がかえってくるのに出会う。その瞬間をどこかで期待していた。岩切は、母親宛に、かならず連絡してくれるように書いた文面をもって、この家に再三おとずれた。それでも依然として連絡はなく、やむをえず停水執行にくると、あの手紙がボックスに入っていたのだ。いちどは『すいどうやさんへ』とだけ、ノートの切れ端にかいただけの手紙があった。他にはなにも書かれていない。切れ端は、幅のひろい罫線が印刷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com